

# 中国の路線闘争



中嶋嶺雄氏

## 中嶋嶺雄東京外大助教授に聞く

その後奇跡的な復活をけた。

文革から「脱文革」への潮流に乗って奇跡の復活をけた鄧小平副首相は、再び定資派のレールを歩られ、ついに解任された。革命・中国の誕生後、大きなうねりのように繰り返されて来た路線闘争のまじまじを改めて思い知らす出来事だった。中国現代史研究の中嶋嶺雄氏（東京外語大助教授）に、路線闘争の持つ意味と背景、文革推進派と大衆とのつながりなどを聞いた。

鄧小平氏の復活から解任決定に至るまでを振り返ると、路線闘争の性格が特徴的に浮かび上がってくると思う。

鄧小平氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというところだ。

# 文革の対立再浮上

## ポスト毛へ不安残す

この結果、文革で失脚した旧幹部が大躍進した。対外面では、革命外交から平和接近、日中正常化など国家外交に変わった。

「この結果、文革で失脚した旧幹部が大躍進した。対外面では、革命外交から平和接近、日中正常化など国家外交に変わった。当時これを「潮流」と呼び、鄧小平復活はこの潮流に乗ったわけだ。

ところが三年夏の十全大会で「反潮流」が鼓吹された。いわば文革の対立が持ち越され、再び表面化したわけだ。この過程で、鄧小平復活というのは最終的には毛主席の承認を得たにせよ、やはり周首相の主導権も出て行かれたことが確認されたように思

る。ポスト毛に大きな不安を残すことになるから。文革派と実務派に対して毛主席はどんな態度で臨んでいるのか。

中嶋氏 中国はこれまで穏歩と急進のサイクルを繰り返してきた。毛主席はある時には急激な変革が連続革命の思想につながるという、他方では統一戦線の柔軟な思想をもっている。中国の政策自身もこの両義性を反映してきた。毛主席思想の解釈をめぐって

また、こんどの事件をみてわかるように、中国人はもともと政

面だけを絶対化するようになったとも端的に表現すると「貧困のユートピア」に尽きる。食生活の現実の試練にさらされて、いわゆる実務派から受け入れられなかった二への反発があるのではないか。

天安門事件は中国にとってユニークな事件だった。お国柄からいって数十万の人が自然発生的に集まることは考えられず、参加した人たちは「自覚をもつて組織された者」とみるのが常識的であろう。鄧支持とまではいかなくても、走資派批判に対する不満や周批判への発展をおそれた人たちがみることができるよう。思。とくに象徴的なのは、事件の中で若い層から文革派の中心人物である江青夫人への批判が行われたことだ。こうした側近政治への批判を押しつぶす形で、無理に事態收拾に持ち込んだ。華国鋒首相がNO.2にランクされたとはいえない、また毛主席の後継者とはいえない。反走資派闘争が急きよぶことで決着をみたところに、将来の不安材料を残したと思う。

文革派の中には、毛主席が健在でありながら、なお現実には交渉する傾向が出ているのだから、早くつみ取ってしまったら――との危機意識が強まった。

――文革派は生産現場にある大衆からどの程度支持されているのか。

私には八年前に昨年訪中したが、物は豊富になり、衣と食に関しては満ち足りつつある。しかし黄金体系は十数年凍結されたままなので、品質のよいものを買ったために品質は副産物だったり、労働点数を一時的に他人から借りて買入れるなどしている。これが資本主義につながるかと批判されてきた。

「走資派」はまさにそうした大衆の要求にこたえて経済建設を進めようとしたわけだ。文革派はこれに警告するだけでなく、深刻な路線闘争の末に打倒した。脱文革の願望を路線まで批判された。ない。

文革派は、鄧氏追放で勝利を手中にしたが、また多数を制したとはいえない。たしかに権力構造の中では、毛主席に近い毛思想の「解釈権」を持つていたのが強みだ。だがその拠点はマスメディアと大学を除くと、軍関係は腐敗、産業分野は大慶、大案などごく一部であり、党内でも大勢を制しているとはいえない。

敵対矛盾と断じ、反革命のレッテルをはった鄧氏の党籍をはく奪できなかったことから

もそれほかがえる。

中嶋氏 毛主席の考え方をもち

貧困の理想郷求め

中嶋氏 毛主席の考え方をもち